



基礎研究と学会の役割

川田 善正[†]

Fundamental Research and Activities of Academic Societies

Yoshimasa KAWATA[†]

今年もノーベル賞の受賞者が発表され、医学・生理学賞を東京工業大学の大隅 良典先生が受賞されたことが発表された。細胞内で不要となったタンパク質などを分解するオートファジー機能を解明した貢献によるものである。この分野の研究は不勉強のため詳しくは存じ上げないが、それまであまり重要と考えられていなかった細胞内でのタンパク質の分解過程に注目し、独創的な成果を挙げられ、人と違う研究を実施することの重要性が注目されている。日本人の受賞は、3年連続となり大変喜ばしく感じるとともに、これも日本の科学技術の基礎力とオリジナリティの高さを示すものとして、誇らしく感じる場所である。日本の科学技術は、今回のオートファジー機能の解明、昨年のニュートリノ振動の観測などの自然科学の解明から、一昨年の青色発光ダイオードのような新しい産業の創出につながる基礎技術の開発など、幅広い研究分野において多くの実績が認められており、これまでの着実な研究実績の積み重ねによるものとする。

その一方で、最近では基礎研究の空洞化、軽視などが多くの方々から指摘されている。短い時間での研究成果が求められ、大学に代表される研究機関においても産学連携が成果として求められるため、短期間で実績の得られやすい研究が多くなり、応用研究の比重が大きくなりつつあるとの指摘である。人員、予算の削減により多くの研究者が予算獲得のためなどの書類作りに時間を費やし、研究に割く時間が短くなってしまっていることも原因として挙げられている。

現在の多くのノーベル賞の成果は、長年に渡る着実な実績に基づくものであり、今後の基礎的な研究に関しては多くの方々から懸念が示されている。大隅先生は、10年後、20年後に日本からノーベル賞受賞者が出なくなるとの指摘をなされている。日本における研究環境が厳しくなり、博士課程進学者が少なくなっており、研究者を目指す学生に対する経済的支援の重要性についても警鐘を鳴らしておられる。

これらの指摘はもっともであり、今後日本の科学技術力が懸念される場所ではあるものの、国が大きな借金を抱え、経済的に余裕のない状況では、科学技術に対する考え方のベースをどこにおくかを十分に議論する必要があると思う。つまり、産業に密接に関係し、生活に直結した研究に重点を移行させるのか、夢のある、真理を追求した研究実績を着実に積み重ねるかなどの議論が必要である。後者の場合においても、もちろん、単なる研究者の趣味に過ぎないような研究に陥らないようなバランス感覚を保つことが必要である。

このような状況において、学会の果たすべき役割、学会に期待される機能は、以前にも増して大きなもの、重要なものになるものと思う。学会活動は、会員の皆様の自由な活動に基づいており、ことさら産学連携を求めたり、応用研究に特化したりするものではないからである。学会が中心となって研究者以外の多くの方々から科学技術の重要性、生活における役割などを説明し、その活動を幅広く発信するとともに、理解を得る努力をすることが重要であるとする。学会の発信力が問われることになるものと思う。レーザー学会の会員の皆様の活躍が今後の科学界をリードしていくことを期待したい。

[†] 静岡大学 電子工学研究所 (〒432-8011 静岡県浜松市中区城北3-5-1)

[†] Research Institute of Electronics, Shizuoka University, 3-5-1 Johoku, Naka, Hamamatsu, Shizuoka 432-8561